

# 目白学園遺跡フェスタの取り組み

—地域文化の核となる学校をめざして—

The Achievements of the Mejiro Gakuen Iseki Festa

—Striving to Make the School the Core of Community Culture—

福井 延幸

(Nobuyuki FUKUI)

## I 目白学園遺跡の特色

### 1 目白学園遺跡の地理的環境

「目白学園遺跡」<sup>1)</sup>は、新宿区中落合四丁目の目白学園から中井御霊神社にかけての約25,000平方メートルの広がりをもつ遺跡である。

武蔵野台地を東流する神田川・善福寺川・妙正寺川の流域には約300箇所の遺跡の存在が確認されている。豊かな水のめぐみは、古くより人々や動植物に素晴らしい生活の場をもたらしたのである。杉並区清水三丁目の妙正寺池に水源をもつ妙正寺川が目白学園遺跡の西から南にかけて台地を囲むように流れるが、この妙正寺川の流れも古くよりこの地域に暮らす人々に豊かなめぐみをもたらしたのである。

### 2 目白学園遺跡の発掘調査史

堀江家文書の1806（文化3）年「葛ヶ谷村絵図」<sup>2)</sup>を見ると、落込川と書かれている妙正寺川の流れに沿って低地には田や畑が切り開かれている。また同じく堀江家文書の江戸末期「下落合村絵図」<sup>3)</sup>からは台地上の中井御霊神社周囲は開墾されていない山林であった様子がわかる。江戸時代後期における目白学園遺跡周辺は未開墾地であった。目白学園の南側に位置する中井御霊神社の創建の明確な年代は不明であるが、1563（永禄6）年の記録がある分木（備射祭の的を描く際に際に用いるコンパス）が伝えられており、少なくともその頃までには存在したようである。中世、森の中に神社はできたが周囲に農家は立たなかった。農民は平坦部や低地に居を構え、台地上の神社は村のはずれの鎮守となった。周囲は杉、松、櫟などの原生林でおおわれ、明治、大正の頃まで手つかずのまま「むじな」も出るような様子であったと地域の古老はいう<sup>4)</sup>。これが、大正期以降には目白文化村に代表されるように開発がすすむ地域ではあるが、目白学園遺跡が保存された大きな理由である。

古くから、目白学園下の崖地には黒曜石の鏃が落ちていてよく拾いにいったという話や学園周辺の未舗装の道路や校庭などから雨の後など土器の破片がみられたということも聞かれる。実際、妙正寺川に面した丘陵からは土器や石器が多数出土しているが、落合遺跡に関する発掘をとともう学術的な先行研究としては、まず、1905（明治38）年に鈴木辰造氏によって葛ヶ

谷御霊神社周辺で採取された石斧などが報告され、落合台地上の遺跡が注目されるきっかけとなった<sup>5)</sup>。また、1924（大正13）年小松真一氏によって落合村下落合（現下落合二丁目）の丘陵で発掘された竪穴住居跡の報告<sup>6)</sup>は新宿区内で最初に発見された竪穴住居跡の報告である。1928（昭和3）年に出された『日本石器時代遺物発見地名表』の増訂第五版の追補一には新宿区内の遺跡が掲載されており、落合遺跡もその中に記載されていて、遺跡として広く認知されていたことを物語っている。

目白学園校地内の目白学園遺跡に関する調査研究としては、1950（昭和25）年の國學院大学考古学研究室による校庭内の発掘調査発見以来、2003（平成15）年まで十三次にわたる発掘調査が実施され<sup>7)</sup>、神田川流域における縄文・弥生・奈良時代の複合集落遺跡であることが明らかになっている。

1950年の調査以降、広く世に知られるところとなった目白学園遺跡であるが、その出土品を収めた佐藤重遠記念館内の出土品資料室が、1996（平成8）年3月25日に新宿区教育委員会より「新宿ミニ博物館」の指定を受けた。館内には発掘された遺物や模型が展示され、近隣のみならず幅広く公開されている。学校内から遺跡が発見され、それら調査の結果を公開するという、地域に密着した資料室をもつ貴重な例といえよう。

また、2001（平成13）年まで校地内には復元竪穴住居があり、広く地域に親しまれていた。復元竪穴住居は1954（昭和29）年の第一次調査で検出された縄文時代中期の第5号住居跡をモデルとして1955（昭和30）年に玉口時雄氏の助言のもと熊谷組の大道一郎氏によって復元された。歴史教材として復元住居の活用がおこなわれるようになったのは1949（昭和24）年の長野県与助尾根遺跡の縄文時代の復元住居にはじまるが、目白学園遺跡の復元住居の製作は先駆的な業績のひとつとして高く評価されていた。しかし不慮の火災によって焼失したのを受け、第五～七次調査によって検出された弥生時代後期の住居跡であるSI 08（第8号住居跡）をモデルに再び復元されていた<sup>8)</sup>。資料室とともに公開され地域のランドマークの一つであった。地域の歴史研究グループであるコミュニティおちあいあれこれが作成した「おちあいカルタマップ」の「し」の項目に「縄文の家も復元 落合遺跡」<sup>9)</sup>とあり、復元竪穴住居が広く地域住民に認知されていたことを物語っている。

## II 目白学園遺跡フェスタの取り組みについて

### 1 遺跡フェスタの取り組みの内容

#### （1）遺跡フェスタの取り組みの概要

前述のように校内に遺跡が存在し、資料室をもつという環境から以前より遺跡に関心を持った見学者が多く、近隣の小中学校などが社会科の授業に関連して見学に訪れるということもしばしばあった。これについては、散発的にではあったが、時間の許す限り本校の社会科教員を中心に遺跡や復元竪穴住居についての説明、学園一号館の屋上から地域の様子を概観するなどの対応をしてきたという経緯がある。また、近隣地域の小中学校の教員を対象とした資料室や

竪穴住居などを利用した遺跡見学会などの実施もされていた。

これらを発展させ、広く遺跡の普及・公開をめざしたものとして2000（平成12）年から「目白学園遺跡フェスタ」が開催されることとなった。

本事業開催については、その取り組み開始にあたって新宿歴史博物館、新宿区教育委員会には多くのアドバイスをいただき、また、多大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表する次第である。

## （2）遺跡フェスタの目的

毎年の遺跡フェスタ実施に際してのねらいは以下のとおりである。

「目白学園遺跡資料室の見学や講演会、各種体験コーナーなどからなる「目白学園遺跡フェスタ」を周辺地域を対象に実施することにより落合遺跡の普及・公開をはかるとともに、目白学園と地域との結びつきをより深め、地域の活性化の契機としたい。また、近隣小・中学校に対しては地域との連携を深める目的を持ち、「総合的な学習の時間」のための研修の場としてや、今後の児童・生徒の社会科見学会などに、より積極的に活用してもらおう契機としたいと考え、本企画の実施を計画した。」

このとおり、出土資料の見学、講演会、各種体験コーナーを三つの柱として遺跡の普及・公開をはかること、それによって学校と地域の結びつきをより深め、地域活性化につなげていくこと、近隣の小・中学校の児童・生徒・教員により積極的に遺跡の活用をはかってもらう契機とするこの三点が実施の目的として考えられている。これら実施の目的は有機的に結合して歴史にちなんだ体験活動と学習活動を軸にした地域活性化事業として、現在では地域に広く認知された社会的活動として地域文化の一つの核となっている。また、これらの目的が遂行されることが学校の広報活動につながっていることはいうまでもない。

## 2 遺跡フェスタの取り組みの特殊性

### （1）遺跡フェスタの開催の体制

本事業は、目白学園中学校・高等学校の校舎・施設を会場に実施され、目白学園中学校・高等学校の教員、事務職員、生徒を中心に運営されている。学校が主体となっている事業ではあるが、ボランティアによる参加が中心となっている。「遺跡フェスタ」と銘打っての事業であり、遺跡の普及・公開をめざして広く考古学、歴史に関するものづくりを中心とする事業となっているが、各教科の専門の教員が関わることによって単なるものづくりイベントに終わらず、各教科の専門性によって実施内容により深みをもたせている。学校には施設と人材がある。それらを活かして社会に還元していくのが重要であり、また地域文化の核となる学校の責務であるといえよう。これは時代の流れでもあり、これからの学校が地域社会の中で生きていくひとつのモデルとなりえるであろう。

本事業は、第1回より継続して新宿区教育委員会の後援を受けている。また、第5回からは

特定非営利活動法人歴史・環境・まちづくり（略称「CUBIS〈キュービス〉」）の後援を受けている。なお、第1回から第3回までは目白学園中学校・高等学校と財団法人新宿区生涯学習財団（新宿歴史博物館）の共催という形式で開催されていた。

第5回から後援を受けている歴史・環境・まちづくりは、「都心で暮らす市民に対して、地域の歴史や自然環境を大切にしながら、将来のまちづくりに役立てることを提案する社会貢献団体であり、このことに重大な関心を持つ市民・行政・企業が協働し、地域固有の文化財及び環境を保全する事業を行い、住民の理解を深めながら、まちづくり及び地域活性化の推進に寄与することを目的としている。」<sup>10)</sup> というNPO法人である。本事業に関しても前記の目的から遺跡解説コーナーをはじめガラス玉づくり、土器づくりなどの体験コーナーについて協働し、縄文の食卓についてはこれを主催している。その他、本事業に対して多くのアイデア・示唆を受けている。本事業は遺跡の普及・公開、地域活性化という目的のもと、学校とNPOとの連携がなされている極めてユニークな取り組みであるということができよう。

## （2）オリジナルな取り組みについて

本事業についての実施内容は以下の表「目白学園遺跡フェスタのあゆみ」のとおりである。

（表）目白学園遺跡フェスタのあゆみ

回数	実施内容
第1回 (平成12年7月16日実施)	内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 講演：荻谷俊介氏（俳優・考古学者）「まほろばの歌がきこえる」
第2回 (平成13年7月15日実施)	内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 ⑤宿題おたすけ隊 講演：賀来孝代氏（宇都宮市教育委員会）「聞き耳頭巾で聞く遺跡からの声」
第3回 (平成14年7月28日実施)	内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 ⑤編布づくり体験 ⑥フリーマーケット 講演：岩城正夫氏（和光大学名誉教授）「縄文時代には心の豊かな生活があった—古代発火技術などを手がかりに—」
第4回 (平成15年7月27日実施)	内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室

目白学園遺跡フェスタの取り組み

<p>第4回 (平成15年7月27日実施)</p>	<p>⑤編布づくり体験 ⑥遺跡発掘調査現場公開 講演：富樫雅彦氏（新宿区教育委員会学芸員・武蔵大学非常勤講師） 「東日本の弥生文化—神田川流域の弥生文化から邪馬台国問題を考える—」</p>
<p>第5回 (平成16年7月25日実施)</p>	<p>内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 ⑤編布づくり体験 ⑥ガラス玉づくり体験 講演：徳澤啓一氏（岡山理科大学講師）「落合式といわれる土器を知りたくて」</p>
<p>第6回 (平成17年8月28日実施)</p>	<p>内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 ⑤編布づくり体験 ⑥ガラス玉づくり体験 講演：小金井靖氏（練馬区教育委員会学芸員・東洋大学講師）「落合遺跡の百年」</p>
<p>第7回 (平成18年8月27日実施)</p>	<p>内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 ⑤編布づくり体験 ⑥ガラス玉づくり体験 ⑦土器づくり体験 ⑧縄文の食卓 講演：荻野早苗氏（NPO法人 歴史・環境・まちづくり）「考えよう！落合遺跡から学ぶ縄文時代の生活環境」</p>
<p>第8回 (平成19年7月29日実施)</p>	<p>内容：①落合遺跡解説コーナー（「触れる展示コーナー」） ②勾玉づくり体験 ③火おこし体験 ④縄文クッキー教室 ⑤編布づくり体験 ⑦土器づくり体験 ⑧縄文の食卓 講演：岡村道雄氏（独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 企画調整部長）「縄文人の食べものとランチの話」</p>

第1回より継続して実施されているのは、落合遺跡解説コーナー（触れる展示コーナー）、勾玉づくり体験、火おこし体験、縄文クッキー教室の四つである。その後、第3回から編布づくり体験、第5回からガラス玉づくり体験、第7回から土器づくり体験と縄文の食卓を新たに実施して内容を充実させてきた。十号館建設に伴う発掘調査にあわせて第4回で特別に実施された遺跡発掘調査現場公開では本校生徒による発掘体験もあわせて実施された。第3回で実施されたフリーマーケットのように根付かなかったものもあった。

落合遺跡解説コーナー〈写真1〉は、目白学園遺跡より出土した土器・石器などの遺物や住居模型、パネルなどを展示して落合遺跡（目白学園遺跡）についての解説を行うものである。パネルによる解説や説明、展示内容については、歴史・環境・まちづくりの調査員の方々に担われている。出土遺物に実際に触れ、遺物の感触、質感、重さなどを実感できるハンズオンな内容が特徴である。第8回には縄文時代に食べられていた旬の食材をクイズで問う「縄文人生き残りクイズ」を実施するなど新たな試みを行っている。

勾玉づくり体験〈写真2〉は、縦3～4センチメートル、横2～3センチメートル、厚さ1センチメートルほどに切り分けた滑石を削り、やすりで磨くなどの加工をして勾玉を製作するものである。目白学園遺跡から勾玉は出土していないが、学齢に達していない参加者であっても比較的短時間で製作でき、完成品はペンダントのように首から提げることのできるもので当初より非常に人気の高いものである。勾玉づくりについては担当教員の指導のほか、中学校・高等学校美術部の生徒が参加者の勾玉製作の補助・支援をしていることによるところが非常に大きい。

火おこし体験〈写真3〉は、ひもぎり式、弓ぎり式、舞ぎり式の火おこし器を使用して火をおこすものである。目白大学からの学生らが中心となって参加者を補助しながら毎回額に汗して火をおこしている。数十分かけて火をおこすことに成功している参加者もあった。

縄文クッキー教室〈写真4〉は、ソバ粉、ドングリ粉、クリ、クルミ、エゴマ、干しブドウ、塩、卵、ハチミツを利用してクッキーを製作するものである。砕いたクリ・クルミと軽く煎ってすりつぶしたエゴマ、細かく刻んだ干しブドウとソバ粉・ドングリ粉を混ぜ、卵・ハチミツ・塩を加えて練った生地を厚さ7～8ミリメートル、直径4センチメートルほどに形作りオーブンで15分ほど焼くと完成する。しかし、食材そのままの味だけではかなり苦味やえぐみが強く、現代人の口に合うようにハチミツの甘味を相当加えたものとなっている。家庭科の授業で使用する調理室を使って行われるクッキーづくりは親子でそろって参加ができ、自分で作ったクッキーをその場で食べることができたり、持ち帰ることができる。縄文クッキー教室については担当教員の指導のほか、中学校・高等学校調理研究部の生徒がクッキーづくりの補助・協力をしていることによるところが非常に大きい。

編布づくり体験〈写真5〉は、縄文時代の布、編布を製作するものである。青森県三内丸山遺跡で発見された「縄文ポシエット」もこの編布でつくられている。横糸に麻ひもを、縦糸にたこ糸を使用してまさに布を編むものであり、30～40分程度で、10センチメートル四方ほどの編布が完成する。

ガラス玉づくり体験〈写真6〉は、離型剤を塗布した太さ2ミリメートルほどの鉄棒にガスバーナーで熱し溶かしたガラスを巻き付けてガラス玉を製作するものである。新宿区内の西早稲田三丁目遺跡の方形周溝墓からもいわゆる巻き付け法に基づいて製作されたことが想定される算盤玉ガラスが出土しており<sup>11)</sup>、地域の出土遺物にちなんだものである。

土器づくり体験〈写真7〉は、縄文などを施した土版や土器のミニチュアを七輪を使用して焼き上げていくものである。野焼きでの製作が出来ない会場の関係上、七輪を使う方法を用い

ている。

縄文の食卓は、歴史・環境・まちづくりによって企画・実施されているもので、ナガイモ・天然ミズ・エゴマの葉などを七輪で焼き、第7回ではイノシシ、第8回ではシカの肉を来場者に提供した。また、シカの角や当時食材としたであろう野草の鉢植えやアワ・ソバの実などを展示し実際に触れられるようにしている。

講演会〈写真8〉については、本事業の三つの柱のひとつであり、毎回地域と考古学に関連した内容の講演が実施されている。講演者については現在第一線で活躍する研究者に依頼しており、本事業が提供する学術的な側面を支えるものとなっている。その時々最新の研究成果が講演されており、非常に好評を博している。各種体験コーナーと比較すると内容の性質上参加者の年齢層は高くなっているが、周辺地域のみならず近県からも講演を目当てに来場する参加者も多い。過去においては、第2回に当初当時国立歴史民俗博物館長であった佐原真氏に講演を依頼し快諾をされていたが、その直後佐原氏が病に倒れ、実現に至らなかったことはかえすがえすも残念なことであった。

〈写真1〉遺跡解説コーナーの様子



〈写真2〉勾玉づくりの様子



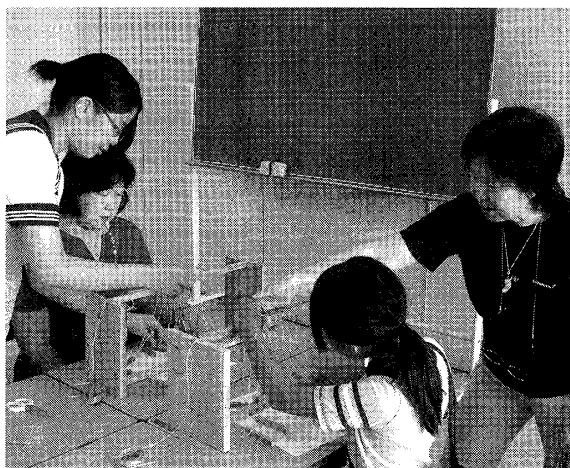
〈写真3〉火おこし体験



〈写真4〉縄文クッキー教室



〈写真5〉 編布づくりの様子



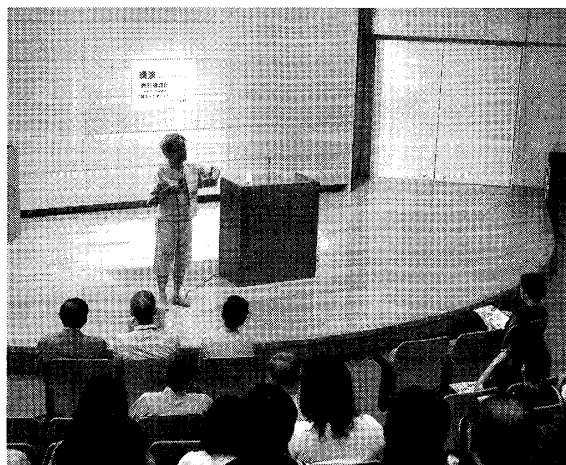
〈写真6〉 ガラス玉づくり



〈写真7〉 土器づくり体験



〈写真8〉 岡村道雄氏による講演会の様子



### (3) 地域の支援

地域の支援については、広報活動を中心とした好意的な協力を関係各所より得ている。毎年遺跡フェスタ実施の数ヶ月前より、落合第二特別出張所と連携をとって、コミュニティ誌『おちあい』に告知を出している。また、実施一ヶ月前には落合親和・中井・西落合・中落合三丁目辻町・上落合中央・上落合三丁目の周辺地域六町会からなる落合第二地区町会連合会に参加して遺跡フェスタへの参加・協力の呼びかけ、許可を得た町会の掲示板を利用したポスターの掲出、町会回覧板による周辺地域への告知がなされている。また、学園の最寄り駅となる西武新宿線中井駅近辺の妙正寺川北側に広がる商店の組織である中井商工会のホームページに情報が掲載されている。その他、落合第一特別出張所や新宿中央図書館をはじめとする新宿区立図書館、新宿区教育委員会にポスターの掲出やチラシによる告知を依頼している。また、事業実施後、その様子がケーブルテレビのシティテレビ中野の「ゴーゴー5チャンネル」にて放映されている。本事業の広報に関しては以上のような地域の支援を得ている。



### 3 遺跡フェスタの取り組みの有効性

#### (1) 遺跡フェスタ開催による教育上の効果

遺跡フェスタ開催による教育上の効果として考えられることは、まず遺跡の普及・公開によって知っているようで知らなかった地域の持つ歴史の一端に触れることによって地域の歴史に対する関心・理解が深まるという効果である。事前の告知を通じて近隣小学校によって教員研修の場として利用されたケースもあり、地域に対して遺跡の積極的な利用を促す契機となっている。さらに上述のとおり本校生徒がボランティアスタッフとして関わっており、教員の指導によく応えながら、ものづくりの講師役、説明役、支援者として、そして参加者としてなどいろいろな形で地域の人たちと関わっている。ホスピタリティーを発揮し地域社会と関わりながら自らも成長しているのである。また、目白大学から毎年ボランティア学生が参加しており、中学校・高等学校と大学の連携がなされた事業となっている。ボランティア学生の中には四年間の在学中の全ての回に参加する学生もおり、実施にあたっての非常に大きな力となっている。

#### (2) 遺跡フェスタ開催による地域貢献としての成果

本事業は、毎年夏休みに実施される地域によく認知された恒例の催しとなっており、参加者の数やその反応から開催の成果を推測することができる。また、本事業の評価としては、例年参加者にアンケートをとっており、そこから考察することができる。第8回のアンケート結果<sup>12)</sup>については以下のとおりである。

今年度の参加者は112名であった。例年参加者の人数を正確に数えているわけではないが、今年度は準備した材料とその残ったものから推測すると、例年の三分の一程度の数に留まったようである。

アンケートは、参加者に対して受付でアンケート用紙を配布し、参加者が退場する際に回収する方法をとった。回収数は40、回収率は35.7パーセントであった。またアンケートとらんで個別インタビューによる聞き取り調査も実施された。質問項目は、年齢・学年、性別、来場回数、居住地域、来場のきっかけ、各コーナーの満足度、自由記述の7項目である。

来場者の割合は、約6割が小学校以下の幼児・児童であり、残り約4割が18歳以上である。幼児・児童の中でも小学校五・六年生が18名と最も多い。性別は約8割が女性である。これは後述するが、学校説明会をきっかけに来場したという回答が多く、学校説明会がターゲットとしている階層と合致している。

来場回数は、約7割が「はじめて」であり、残りの約3割が複数回来場のいわゆるリピーターである。

居住地域は新宿区内が45パーセント、新宿区以外の東京二十三区内が32パーセント、東京市部9パーセント、他県14パーセントとなっている。近隣からの来場者数については隣接の中野区を新宿区内と合わせると50パーセントとなり、半数が近隣地域からの来場といえる。

他県からは神奈川県や埼玉県、千葉県など遠方からの来場がある。

来場のきっかけは「その他」が14名と最も多いが、その内訳は「友達」が多い。ついで「学校（説明会）」8名、「新聞・雑誌」6名、「チラシ」4名、「町内会」3名、「インターネット」2名と続く。個別のインタビューでは「入試を控えた学校見学」「夏休みを利用した体験学習型のイベントに興味があった」という意見がみられた。今年度、新聞には朝日新聞の情報欄「マリオン」に遺跡フェスタ開催の情報が掲載された。

各コーナーの満足度については勾玉づくり、火おこし体験、ガラス玉づくり、土器づくり、縄文クッキーづくり、編布づくり、遺跡解説コーナー、縄文の食卓、講演について「おもしろかった」、「まあまあ」、「普通」、「つまらなかった」の四段階で評価を調査した。勾玉づくりでは93.1パーセント、火おこし体験では90.0パーセント、ガラス玉づくりでは83.3パーセント、土器づくりでは81.0パーセント、遺跡解説コーナーでは78.6パーセント、縄文クッキーづくりと編布づくりと縄文の食卓では75.0パーセント、講演では37.5パーセントが「おもしろかった」と最も高い評価をしている。各コーナーとも「つまらなかった」と答えたものはなく本事業が高い評価を得ていることが実証できた。各種体験コーナーの評価の高さは実際にやってみることの楽しさ、作ってみることの楽しさ、また作ったものが持ち帰ることが出来る楽しさが評価されたものということができよう。縄文の食卓についても個別インタビューで、シカの肉を食べてみての感想として「初めての体験」、「意外なおいしさに驚いた」といった回答が寄せられている。講演については、アンケートの回答した年齢層が講演のターゲットとなる層と合致しないため必ずしも高い評価とはなっていない。しかし当日のアンケート以外に、参加生徒に対しては後日レポートの提出を課していて、レポートの内容としては「楽しかった」、「有益であった」、「教科書では知ることのできない歴史を知ることが出来た」という意見がほとんどである。

自由回答や個別インタビューでもほとんどの意見が「楽しかった」、「イベントがたくさんあってよかった」とあり参加者の満足度は非常に高い。また「皆さん親切だった」、「学校が気に入った」などの回答も寄せられており、学校そのものの評価についても高いものとなっている。一方、不満意見としては「食べる場所がない」というものがあった。校舎改築の影響で今回は飲食コーナーの開設がされていなかったこともあり、今後の課題といえるであろう。

### Ⅲ 将来への展望とまとめ

本事業は、学校と地域、NPOの連携がなされた地域文化の核となる取り組みとして既に実績をあげていると思われる。今後さらに本事業を発展させていくために次のような展望を持っている。本事業についての将来への展望を列挙することによってまとめにかえたい。

#### ①「目白学園遺跡検定」の実施

現在、その地域の歴史や文化、観光などをテーマに出題してその知識を問う「地域検定」が

数多く実施されている。地場産業や観光、地域振興に寄与するものとして注目されているのである。

遺跡フェスタにおいても、このような地域検定のひとつとして第8回に「目白学園遺跡検定」を実施予定であったが、周囲への告知不足などの準備不足から実施には至らなかった。広報活動を充実させた上で実施に向けて努力していきたい。地域の魅力は、それぞれの地域を取り巻く自然や風土、その中で培われた歴史、文化に根ざしたものであり、それらを現代的な課題から新たな視点で捉えなおすことから個性豊かな地域が創造される。地域学「落合学」の可能性につながるものであり、地域を捉えなおすという視点からも地域検定の実施は有効性があると考えられる。多くの地域検定では「合格者」を地域でどのように活用するかということが課題となっているが、地域をよく深く知る人たちに本事業に積極的に関わってもらうことも視野に入れていくべきであろう。

## ②PTA・地域とのさらなる連携

地域活性化は学校を含めた潜在、顕在化した地域資源の融合によってもたらされるものであり、これまで忘れられていたり、意識されてこなかったことの発見によって見出された新しい力によって生み出される。地域の中でともに学びあうネットワークが構築されることによって新しい地域文化の一つのかたちが確立されるのである。学びあうネットワークの中心にある学校は地域文化の中でその核となる役割を果たすのであり、地域の中であってともに学びあうネットワークを構築し、地域文化の蓄積をもたらしソーシャル・キャピタルを豊かにしていく<sup>13)</sup> ためにもPTAや地域の関係各所とより緊密な連携をとれるようにしていきたい。学校と地域の結びつきを深めるという本事業の目的のとおり、これからの学校のあり方として施設・人材を活かしてこれを地域に還元していく。また、結びつきを深めるということでは、フローだけでなくPTAや地域から人材を得ていくことも考えていかねばならないだろう。

## ③内容のさらなる充実と継続

事業内容や広報体制をより充実させて地域にある遺跡の歴史的・文化的な価値や意義をより楽しくわかりやすく伝えるという普及・公開活動を、参加者の感性を刺激するような地域貢献事業として継続して実施していくことがさらなる発展のためには重要となるだろう。毎年組織的に継続して実施していくことによって地域に根付いた事業として認識されていくのである。

【注】

- 1) 調査報告書類は「落合遺跡」であるが、新宿ミニ博物館などで使用されている目白学園一帯の「目白学園遺跡」の呼称が広く認知されており、本論では主として目白学園遺跡として表記し、落合遺跡と併用していく。
- 2) 新宿区教育委員会『地図で見る新宿区の移り変わり 戸塚・落合編』1985年, 68～69ページ
- 3) 新宿区教育委員会『地図で見る新宿区の移り変わり 戸塚・落合編』1985年, 72～73ページ
- 4) コミュニティおちあいあれこれ『明治の思い出(復刻版)』1998年, 12ページ
- 5) 鈴木辰造「石器時代遺物の新発見地」『考古界』第4編第9号 考古学会 1905年
- 6) 小松真一「金滓を出す竪穴遺跡」『人類学雑誌』第39巻第7・8・9号 東京人類学会 1924年
- 7) 新宿ミニ博物館『目白学園遺跡』
- 8) 新宿区落合遺跡調査団 新宿区埋蔵文化財ニュース「落合(目白学園)遺跡見学の手引き—縄文時代中期と弥生時代後期の復原住居—」1997年
- 9) コミュニティおちあいあれこれ「おちあいカルタマップ」1998年
- 10) 特定非営利活動法人歴史・環境・まちづくり 事業案内2007
- 11) 新宿区西早稲田三丁目遺跡調査会『東京都新宿区西早稲田三丁目遺跡Ⅱ—西早稲田三丁目プロジェクト新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』1997年, 144ページ
- 12) 「目白学園遺跡フェスタアンケート・インタビュー結果」特定非営利活動法人歴史・環境・まちづくり 第13回活動報告 2007年8月15日
- 13) 拙稿「地域文化の核となる学校の役割」『目白大学短期大学部紀要』43号 2007年, 46ページ